

月報

5号

発行所

青丘文庫

発行★韓 哲 職 編集★金 慶 浩
〒654 神戸市須磨区千歳町4丁目1-3
エパーグリーンビル5F
TEL (078) 734-5989

紀伊風土記の丘を訪ねて

金 静 美

昨年10月のある日、紀の川河口の南岸に廣がるなだらかな丘陵地帯に登った。そこは、岩橋ヶ塚古墳群、大谷山古墳群、大日山古墳群などと名付けられた四世紀から七世紀にかけての古墳が、確認されているものだけで六百基余りあるところで、現在は、古墳の保存をかねて整理され、紀伊風土記の丘と呼ばれている。

和歌山の古称である「紀伊国」は、百済氏族の木氏が渡来して「木の国」と称した（あるいは称された）ことに由来するだろう。先の古墳から発掘された遺物から、大陸文化との親しい関係が証明されているが、中でも紀の川を挟んで、南岸の古墳群に向かい合っている北岸の大谷古墳から出土した馬具、馬甲はよく知られている。

横穴式古墳の一つに入って懐中電燈をつ

ると、石で何層にも積み上げた玄室の壁があり、どうして置いたのかと考え込ませる大きな天井石がある。どのような人がここに眠ったのか、この地域に、大陸から来た人々のどのような暮らしがあったか、と思う。一つの玄墳は、陽あたりもよく、紀伊水道の向こうに淡路島を望むことができる。ある古墳は、北を向いて紀の川の流れをのぞき、和泉山脈を眺めている。古墳時代の人々には、こころへんは住みやすかったのだろう。今国、和歌山の朝鮮人史を書いている時、朝鮮・朝鮮人との関係について記述されているものを手あたり次第読み過ぐ、近代の意義で国家が成立する途へ前の、朝鮮と日本人の往來のことも考えて見た。

私達の父母の時代、和歌山（日本と諸君でも良いか）は朝鮮人が朝鮮人として自然と共に生きていける場所ではなかっただろう。だが、朝鮮人であることはあたりまえだったのだ、その自然性が、強えられる日本文化とはねとばし、生活も切り開いてくる源動力になったように思う。私たちや、子供、孫の時代はどうだろうか。言語も何かも知れぬが、朝鮮人としての自然性は、それを損なおうとする者との戦いの中で生れ、あるいは育つ確かなものになつていくのではなからうか。

★ 研究会報告

在日朝鮮人運動史研究会関西支部会(第六回)

「報告者

水野直樹氏

(一九八五・三・一〇(日))

「新幹会京都支部・名古屋支部について」

日本で組織された新幹会の四支部のうち東京支部については、「朝鮮史叢」第一号に書いたが、残りの大阪・京都・名古屋の支部もそれぞれ独自の特色をもっており、在日朝鮮人運動史における位置も重要なものであった。今回は、京都と名古屋の支部の設立経緯、幹部構成、活動そして解消の経緯などを検討した。

京都では、一九一〇年代に留學生団体、二〇年代半ばに労働団体が生れていた。京都支部はこれらを基盤としつつ、クリスチャンも加えて、二七年六月二五日に設立された。会員は百名前後で、設立時の幹部二十四名中、学生一八名、朝鮮労働組合幹部五名という割合であった。学生の中にも社会主義者、クリスチャンなど様々な傾向の人物がいた。

京都支部の活動としては、二七年後半の朝鮮総督府政治と對運動をあげることができ、二八年後半以降は活動

らしいものは見られなくなる。弾圧、中心人物の卒業、帰国などがその原因と見られる。三〇年初めには、朝鮮労働組の全協への解消とともに京都支部も消滅した。一時、支会再建の動きも見られたが、全協側の批判で実現できなかった。

名古屋支部は、一九二九年二月一日設立された。名古屋には支部の基盤となる朝鮮人団体は存在していなかったが、名古屋居住の文筆家と朝鮮国内(慶北尚州)から渡ってきた活動家が支部設立の中心となった。当初の会員数は四三名、幹部、会員の多くは労働者だった。クリスチャンも含まれていた。名古屋支部は御用団体祖愛会に対抗しつつ、朝鮮労働組合の結成に努めた。これは他の支部とは逆の関係であった。三〇年前半に朝鮮労働組は全協に解消したが、名古屋支部は全協からの批判にもかかわらず存在しつづけた。支部を守ったのはクリスチャンなどであった。

三一年五月、本部の解消に伴い、名古屋支部も解消することとて、「同声会」という名称で民族団体を残すことが求められたが、これは立ち消えとなってしまった。

京都支部、名古屋支部は、会員、幹部の構成、設立、活動、解消の経緯が大きく異なっていたが、いずれも在日朝鮮人

運動史において「民族協同戦線」の性格をもつものとして、重要な位置を占めていることは間違いない。

朝鮮民族運動史研究会 第四回

「報告者 小杉勉次氏 一九八五・三・一〇」

「実存の出会いと真理探求について」

現象の背後にある動機、内面的衝動を追求したのはフロイドであり、その深層心理学だと言えるが、学問的世界の問題としてこれを対象と主体との関係で論じたのは、かのマックス・ヴェーバーである。彼は常に学問の対象として研究者が設定している外的世界（理性的認識と論議との対象と言いかねる可）と研究者自身の世界観の立場と鋭く問題にした。研究者自身が究極的に拠って立つ世界観をあますところなく提示しつつ、理性による検討を要求した。そして私はヴェーバーのこの主張を、近代主義の独断に対するひとつの批判として捉える限り正しいと思うている。学的営為とは常に外的客観の世界とそれに接近する主体（研究者）の内的主観の世界とが深く切り結んだ瞬間に最大の結実を生むと考えられるから。

私にとっての朝鮮との出会いは少なくともそのようであったと言える。人は誰しも歴史の巨大なうねりに翻弄されつつ、自我確立を求め、その大波に抗い底にひそむ意味を探求せんとするものだ。深草の山村に生をうけた私には、日中戦争による父親の六年にわたる「出征」と引きつづいての太平洋戦争としてこの波はあった。幼少時中国帰りの父から一点だけサビついた軍刀の秘密を聞いたことがある。あの「千々シコロ」(父は言った)たちに穴を掘らせ、ふちに首だけ出させて上からバツサリやった際について血痕なのだと。私にとってアジアの現代史との出会いの原点はここにあるといつてよい。東京での学窓時代を送るさなかで、私は在日朝鮮人二世にあたる女性と出会い、後に彼女の夫となった(当時南ヴェトナム政府)国費留學生のV兄と交わりを得るに至った。彼らは結局カナダに亡命して行った。Vさんが日本帯在中に北ヴェトナム(ホーチミン政府)支持者となったが故に、旅券とビザ発給と禁示されてしまったので。

その後私はソウルへと旅立つ。日韓条約締結三年後のこと。この地で私はアジアを視る目(従って日本への視覚)に根本的変革をせまられた。視座の変革は同時に生きざまの変

革を要求し、帰国後私は一日日本人キリスト教徒として一在日韓国人団体の中で働く機会を得た。その後体験した西欧(ドイツ)留学に関してはもはや余白がない。一点、個別の出会いを通して普遍的存在のあり方を向うていくという庄の視座が私にとって今日まで多くをあたひつつの真理である。これは誰にもゆずれない私の主体的真実である。

次回案内

① 朝鮮民族運動史研究会 (第四五回)

報告者 鹿嶋節子氏 (一九八五・五・一六(土)三時)

テーマ 朝鮮義勇隊について

② レクレーション (在日朝鮮人運動史研究関西部会代行)

場所 長岡京市の山中 (金村氏の宅内)

日時 一九八五年五月二日 神足駅前土曜集合

※ 参加希望者は 五月二〇日迄 福田雄一迄連絡の事

★ 五月の星が闇に 轟音する 森羅萬象に 生動する

는 봄은 살아난 잡니다. 草綠色 새싹들이 三春客을 부

르는 溪谷에서 自然과 더불어 牛肉, 山猪肉, 山蒸로

就弊의 被園을 푸는 野遊會에 모두 参加합니다.

新着図書案内

▲ 朝鮮中央日報(堂芸面)抄(一九三三〜三八) 한빛문화

대한민국을 건설한 조국(一九三七〜一九四三) 장로회총회

한글판・八〇年九月 全七卷

▲ 韓國基督教公報 全五卷・尹根鎭編・基督教公報社 八四年

▲ 分析의 統一의 民族主義・金學俊著 三石堂社 八三年

▲ 東西交渉의 近代韓國思想・琴童泰著・成均館大 八四年

▲ 生活의 分析의 社會・박일환著・도산출판 八四年

▲ 韓國會計史研究・尹根鎭著・韓國研究院 八四年

▲ 朝鮮의 社會 八一年号 皓堂 小石의 社會學 八五年

▲ 韓國文化 5 韓國文化研究所編 서울대학교출판부

▲ 慶北史學 七輯 慶北史學會編 慶北대학교人文史學

..... 八四年

お願い

当文庫からお借りになった書物は 約束した短期間内にお返し下さい。特に東亞日報は閲覧者が多いので早急にお返し下さるようお願いいたします 金慶浩 白